

〔原 著〕

学生の感情を表す語彙と情動スキルの変化

小玉 有子¹⁾、齋藤三千政¹⁾、戸来 睦雄²⁾

要 旨

現代の若者を取り巻く急激な環境の変化と、若者言葉の増加を踏まえて、本研究では、「感情・気分・情動を表す語彙」の変化と「情動スキルに関する自己評価」の経年比較から、学生の特徴や課題を明らかにすることを目的とした。A県・B県の大学3校の2011年・2012年・2013年度入学生を対象に、情動に関する質問紙調査を行い、結果を分析した。感情・気分・情動を表す語彙数は、2011年から2012年にかけて急激に増加しているが、省略された語彙や本来の意味とは違う語彙、多世代に共通認識されない語彙が多く、「1人のみが表出した語彙」が年々増加していた。社会人による語彙の評価は、2011年の語彙の評価が最も高く、また、辞書に基づく評価でも、2011年が他の群に比べて評価が高かった。一方、情動スキルに関する自己評価は、3群間で差が無かった。語彙は2011年から2013年にかけて大きく変化したが、多くの学生が、自分の情動スキルに不安を感じていないことがわかる。

今回の調査期間が、スマートフォンの普及、LINE・SNSの利用者が急増した期間と一致していることから、学生の語彙の変化には、このことが少なからず影響を与えていると思われる。また、学生の日常のコミュニケーションスタイルは、今後もSNS・LINEの利用がさらに増加することが予想され、対面コミュニケーションを苦手とする学生の増加が危惧される。学生の情動に関する能力・スキルの向上のためのプログラムを構築することが急務であると考えられる。

キーワード：感情を表す語彙、情動スキル、若者言葉、SNS

I 緒言

感情は、生後3ヶ月頃には「興奮」から「快」と「不快」に分かれ、発達するに従って分化が進むと考えられている。ブリッジスの情緒分化説では、5歳で「快」は6つに、「不快」は9つの感情に分化することになる。また、プルチックの感情立体モデルから考えると、8つの基本感情は人生の初期にすでに存在し、発達するにつれて混合感情もしくは複合感情という複雑な感情が意識されることになる。私たちは、自分あるいは相手が経験している感情を理解し、言語的なラベルを貼る。さらに感情状態を会話やメールなどで相手に伝えたり日記などに記録したりするためには、言語による表現が必要である。こうした感情経験の言語表現は、感情に関する知識にささえられている¹⁾。しかし、青年期になっても、経験している感情が言語的にどう命名されているのかを識別できないと、たとえその感情を経験しても、体系だっ

た記憶としては残らない。活字離れをし、文学書が読まれなくなり、映像やコミックばかりに親しんでいる現代人とくに青少年たちは、感情や気分、あるいは人の気持ちのデリケートな違いを、言語的に識別できるほど豊富な語彙を持ち合わせない²⁾。

ここ数年、毎年「むなしい」「せつない」「やるせない」の違いを学生に問うが、明確な答えが返ってくることはなく、感情の機微を表現する語彙を知らない学生が増えていると感じる。また「やばい」「うざい」等本来の意味とは異なる言葉が、日常的に使われていたり、簡略化された表現が増えたり、表現された言葉の裏側に隠された感情を読み取ることができなかつたり、若者の感情表現や情動の読み取り能力の低下が懸念される。若者言葉は乱れているという認識は、いつの時代でも問題にされる事項の一つであるが、文化庁が行っている「国語に関する世論調査」の近年の結果を見ても³⁾、国民の多くが、若者言葉は日本語の乱れであるという認識を持っている

1) 弘前医療福祉大学保健学部 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

2) 弘前医療福祉大学短期大学部

ことがわかる。厚生労働省では、平成19年に医政局看護課が看護学生のコミュニケーション能力の不足も指摘し、教育課程においてもコミュニケーションに関する教育内容の強化を指示している⁴⁾。また、文部科学省は平成22年「コミュニケーション教育推進会議」を発足させた。

現代の若者を取り巻く環境は、ソーシャルネットワークサービス（以下SNSと記す）を含め、大きく変化してきた。その影響を受け、若者の言葉は急速に変化し、それに伴い情動スキルの自己評価の低下も起きているのではないかと予想された。

そこで、本研究では、3年間にわたって、学生の「感情・気分・情動を表す語彙」の変化と「情動スキルに関する自己評価」のデータを収集し、経年比較から、その特徴や課題を明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1 対象

A県およびB県の医療・福祉系大学および短期大学3校に在籍する2011年度入学生189名(以下2011年と記す)、2012年度入学生260名(以下2012年と記す)、2013年度入学生209名(以下2013年と記す)を対象とした。

2 調査期間

- 1) 2011年度入学生対象 2011年6月1日～6月30日
- 2) 2012年度入学生対象 2012年6月1日～6月30日
- 3) 2013年度入学生対象 2013年6月1日～6月30日

3 調査方法

各年度、調査対象の学生には、共同研究者が大学別に研究の趣旨および倫理的配慮について、口頭および文書で説明し、協力を依頼した。研究協力を承諾した学生に対し、筆者らが作成した無記名の選択肢式および自由記述式併用の自記式質問紙を直接配付した。学生はその場で記入し、記入もれがないか確認後に、回収箱にて回収した。

4 調査内容

- 1) 属性
専攻と年齢。
- 2) 情動に関するスキルの自己評価
評定尺度は、豊田ら(2007)が作成した情動知能尺度 高校生用 J-ESQ (Japanese Version of Emotional Skills & Competence Questionnaire)⁵⁾ の3因子の内、因子負荷量の高い5項目ずつ計15項目について、5件法による回答を求めた。項目

の内訳は、〈情動の表現と命名〉5項目(1. 4. 7. 10. 13)、〈情動の理解と認識〉5項目(2. 5. 8. 11. 14)、〈情動の抑制と調節〉5項目(3. 6. 9. 12. 15)である。(後に、小中学生を対象に山田ら(2012)が実施した情動スキルに関する調査結果⁶⁾と、高校生・大学生の情動スキルに関する調査結果を比較検討するために、同じものを使用した。)

3) 感情・気分・情動を表す語彙の調査

感情・気分・情動を表す語彙を、喜怒哀楽別に、普段使用している言葉も含めて、思いつく限りの言葉「表出語彙」を記入してもらった。データは〈一人当たりの表出語彙数〉〈表出した人数別語彙数〉〈語彙の評価〉で整理した。

語彙の評価は、二通りの方法で評価した。一つは、社会人の語彙の認知度を評価するため、無作為抽出した30歳・40歳・50歳・60歳・70歳代の社会人5名に依頼して、2011年・2012年・2013年が出出した全ての語彙を、1人ずつ評価してもらった。評価方法は、その語彙が、指定された感情・気分・情動を表していると思われるものは1、思わないものは0とし、5人の総点をその語彙の評価点数とした。判断は各人に任せしたが、年度によって評価の違いがないように留意してもらった。もう一つの方法は、辞書に記載されている既知語であるかないかで、広辞苑(五版)、明鏡国語辞典の両方にあるいは一方に記載されていて、その辞書で説明されている意味や用例と、ほぼ同じように使用されている語彙を1、辞典に記載されていない、または明らかな誤用や感情表現として不適当と思われる場合を0とした。なお、辞典は、学生の使用頻度が高い電子辞書(カシオ)に記載されたものを使用した。評価は、研究対象とは無関係な心理系大学院生3名のグループ(平均年齢23歳)と、日本語表現法を担当する共同研究者(60歳台)がそれぞれ行い、双方の評価結果を総合的に判断したうえで決定した。総合的に見ても判断が難しい語彙は0とした。

5 分析方法

分析には、Excel2013を使用した。

- 1) 情動スキルに関する自己評価の比較は、f検定実施後、スチューデントのt検定を行った。
- 2) 喜怒哀楽を表す一人当たりの表出語彙数の経年比較は、f検定実施後、2011年-2012年、2011年-2013年、2012年-2013年でスチューデントのt検定を行った。
- 3) 2011年・2012年・2013年の「1人のみが出出した

語彙」が全体に占める割合の経年比較は、f 検定実施後、 χ^2 検定を行った。

- 4) 社会人による語彙評価の比較は、f 検定実施後、2011年 - 2012年、2011年 - 2013年、2012年 - 2013年でスチューデントの t 検定を行った。
- 5) 辞書に基づく語彙評価の比較は、f 検定実施後、2011年 - 2012年、2011年 - 2013年、2012年 - 2013年でスチューデントの t 検定を行った。

6 倫理的配慮

対象者に、口頭および文書で、研究目的、調査協力の任意性、不利益の有無、個人情報やデータの管理方法を説明し、同意が得られた学生にのみ、質問紙の記入をお願いした。本研究は、弘前医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ 結果

1 対象の属性

学生の専攻内訳、性別、年齢構成は、表1に示す。

2 情動スキルに関する自己評価

情動に関するスキルの自己評価では、2011年、2012年、2013年の3群間に有意な差は認められなかった。3群すべてにおいて、15項目中14項目が平均3.00以上であった。最も得点の高かった項目は、「6 誰かに誉められると、もっと熱心に頑張ろうとする」で、3群とも平均4.00を上回っていた。3群とも平均3.00に達しなかった1項目は、「4 自分の気持ちを、上手に言葉で説明することができる」であった(表2)。

表1 対象者の属性

項目	2011年 (n=189)		2012年 (n=260)		2013年 (n=209)		
	n	%	n	%	n	%	
回答者	看護学専攻	45	23.8%	108	41.5%	70	33.5%
	作業療法学専攻	38	20.1%	39	15.0%	43	20.6%
	言語聴覚学専攻	26	13.8%	20	7.7%	27	12.9%
	介護福祉専攻	78	41.3%	93	35.8%	68	32.5%
	無回答	2	1.1%	0	0.0%	1	0.5%
性別	男	78	41.3%	94	36.2%	73	34.9%
	女	104	55.0%	165	63.5%	131	62.7%
	無回答	7	3.7%	1	0.4%	5	2.4%
年齢	10代	145	76.7%	221	85.0%	157	75.1%
	20代	27	14.3%	20	7.7%	20	9.6%
	30代	10	5.3%	13	5.0%	11	5.3%
	40代	5	2.6%	3	1.2%	16	7.7%
	50代	1	0.5%	2	0.8%	3	1.4%
	無回答	1	0.5%	1	0.4%	2	1.0%

表2 情動スキルに関する自己評価の比較

質問項目	2011年(n=189)		2012年(n=260)		2013年(n=209)		有意水準
	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自分の気持ちをすぐに言葉に表すことができる。	3.48	1.01	3.50	0.92	3.50	0.96	
2. 私は、相手が思っていることを隠そうとしても、それに気付くことができる。	3.53	0.88	3.50	0.84	3.43	0.98	
3. 毎日いい気分が続くように心がけている。	3.97	3.03	3.75	0.97	3.67	1.03	
4. 自分の気持ちを、上手に言葉で説明することができる。	2.92	0.96	2.96	0.93	2.95	0.91	
5. 私は、相手が嫌な気持ちを隠そうとしても、それに気付くことができる。	3.66	0.85	3.70	0.82	3.54	0.91	
6. 誰かに誉められると、もっと熱心に頑張ろうとする。	4.08	0.91	4.09	0.90	4.05	0.95	
7. 自分が感じている気持ちを、うまく表すことができる。	3.20	0.96	3.25	0.95	3.15	0.97	
8. 私は誰かと一緒にいるとき、その人の気持ちの変化(嬉しい・悲しい・楽しい・怒る等)に気付くことができる。	3.88	0.80	3.88	0.77	3.91	0.89	
9. 気分の良い時には勉強(仕事)がはかどり、頭にもよく入る。	3.88	1.04	3.80	1.02	3.86	1.09	
10. 自分がどのように感じているかを、簡単に言葉で言い表すことができる。	3.24	0.92	3.26	0.95	3.33	0.96	
11. 私は、一緒にいる人が落ち込んでいるとき、それに気付くことができる。	3.93	0.78	3.93	0.78	3.96	0.87	
12. 嫌な気持ち(腹が立つ・辛い等)になったとき、気持ちを切り替えて頑張ろうとする。	3.48	1.07	3.45	1.14	3.38	1.04	
13. 自分の気持ちを、上手く言葉や態度で表すことができる。	3.28	0.98	3.28	0.93	3.19	0.89	
14. 私は、相手の顔の表情から、その人の気持ちがわかり、どんな気持ちなのか言葉にすることができる。	3.33	0.85	3.34	0.84	3.32	0.92	
15. 気分が良い時には、どんな問題でも解決できると思う。	3.29	1.23	3.28	1.10	3.14	1.04	

*** P < 0.001 **P < 0.01

3 喜怒哀楽を表す語彙数

学生が表出した喜怒哀楽を表す語彙数は、表3に示すとおりで、1人あたりが知っている平均語彙数は、2012年が最も多くなっている。2011年、2012年、2013年の3群間の検定を行ったところ、2011年と2012年では〈喜〉〈怒〉〈哀〉〈楽〉全ての項目で有意差が見られた。2011年と2013年では、〈喜〉〈哀〉〈楽〉で有意差があった。2012年と2013年には差がなかった。

4 表出した人数別の語彙数

表出された語彙を、年度ごとに、「1人のみが表出した語彙」「2人が表出した語彙」「3人が表出した語彙」「4人以上が表出した語彙」に分けて割合は比べた（表4）。

表3 喜怒哀楽を表す語彙数の比較

2011年						
語彙	n	1人平均	SD	有意水準		
				2012年	2013年	
喜	351	1.86	1.53	***	***	
怒	424	2.24	2.00	***	***	
哀	315	1.67	1.54	***	**	
楽	258	1.37	1.38	***	***	

2012年						
語彙	n	1人平均	SD	有意水準		
				2011年	2013年	
喜	695	2.67	1.91	***		
怒	754	2.88	2.03	***		
哀	635	2.44	1.70	***		
楽	550	2.12	1.55	***		

2013年						
語彙	n	1人平均	SD	有意水準		
				2011	2012	
喜	525	2.41	1.70	***		
怒	524	2.51	1.74			
哀	454	2.17	1.49		**	
楽	401	1.92	1.37		***	

*** P < 0.001 **P < 0.01 *P < 0.05

表4 表出した人数別の語彙数の比較

喜						
語彙	2011年		2012年		2013年	
	n	%	n	%	n	%
1人	38	60.3%	129	69.7%	103	74.1%
2人	6	9.5%	17	9.2%	12	8.6%
3人	4	6.3%	11	5.9%	3	2.2%
4人以上	15	23.8%	28	15.1%	21	15.1%
合計	63	100.0%	185	100.0%	139	100.0%

怒						
語彙	2011年		2012年		2013年	
	n	%	n	%	n	%
1人	76	59.8%	167	68.4%	138	73.4%
2人	20	15.7%	30	12.3%	17	9.0%
3人	12	9.4%	10	4.1%	5	2.7%
4人以上	19	15.0%	37	15.2%	28	14.9%
合計	127	100.0%	244	100.0%	188	100.0%

哀						
語彙	2011年		2012年		2013年	
	n	%	n	%	n	%
1人	59	59.6%	156	70.0%	128	74.9%
2人	16	16.2%	18	8.1%	17	9.9%
3人	6	6.1%	12	5.4%	6	3.5%
4人以上	18	18.2%	37	16.6%	20	11.7%
合計	99	100.0%	223	100.0%	171	100.0%

楽						
語彙	2011年		2012年		2013年	
	n	%	n	%	n	%
1人	36	58.1%	158	76.0%	115	78.8%
2人	6	9.7%	18	8.7%	13	8.9%
3人	3	4.8%	5	2.4%	3	2.1%
4人以上	17	27.4%	27	13.0%	15	10.3%
合計	62	100.0%	208	100.0%	146	100.0%

「1人のみが記した語彙」の割合は、〈喜〉では、2011年60.3%、2012年69.7%、2013年74.1%と、年々増加していた。同様に〈怒〉では、2011年59.8%、2012年68.4%、2013年73.4%、〈哀〉では、2011年59.6%、2012年70.0%、2013年74.9%、〈楽〉では、2011年58.1%、2012年76.0%、2013年78.8%と増加傾向が見られた。そこで、3群間の「1人のみが表出した語彙」と「2人以上が表出した語彙」の割合を比較したところ、〈喜〉では差が認められなかったが、2011年の〈怒〉〈哀〉〈楽〉において、「1人のみが表出した語彙」の割合が有意に少ないことがわかった（表5）。「1人のみが表出した語彙」には、〈喜〉では「てへぺろ」「どどん波」、〈怒〉では「ぶんぶん丸」「ねえわ」、〈哀〉では「ズドーン」「だるい」、〈楽〉では「まじヤベエ」「ペロペロ」等、若者言葉、オノマトベ言葉、意味不明な言葉が多数見られた。

5 語彙の評価

1) 社会人による語彙評価の比較

30歳代から70歳代の社会人5人に評価してもらった合計点の平均と1語彙の評価平均は、表6に示す通りである。3群間を比較すると、〈哀〉には有意な差はなかったが、2011年と2012年で〈喜〉〈怒〉〈楽〉に有意な差があった。また、2011年と2013年で〈怒〉〈楽〉で有意な差があった。2012年と2013年には、全ての語彙で差が認められなかった。〈怒〉〈楽〉に関しては、2011年に記された語彙が、他の群に比べて社会人の評価が高いと言える。

2) 辞書に基づく評価の比較

辞書に基づく評価の合計点の平均と1語彙の評価平均は、表7に示す通りである。3群間を比較すると、〈喜〉〈哀〉〈楽〉で有意な差が認められた。〈怒〉は、2011年と2012年では有意差があったが、2013年とで

表5 「1人のみが表出した語彙」の割合の比較

喜				怒			
	2011年	2012年	2013年		2011年	2012年	2013年
1人	38	129	103	1人	76	167	138
2人以上	25	56	36	2人以上	51	77	50
合計	63	185	139	合計	127	244	188
期待値(1個)	43.953	129.070	96.977	期待値(1個)	86.560	166.304	128.136
期待値(2個以上)	19.047	55.930	42.023	期待値(2個以上)	40.440	77.696	59.864
x2(2) =	3.905		ns	x2(2) =	6.440		P < 0.05
調整残差(1個)				調整残差(1個)	-2.288*	0.127	1.896
調整残差(2個以上)				調整残差(2個以	2.288*	-0.127	-1.896

哀				楽			
	2011年	2012年	2013年		2011年	2012年	2013年
1人	59	156	128	1人	36	158	115
2人以上	40	67	43	2人以上	26	50	31
合計	99	223	171	合計	62	208	146
期待値(1個)	68.878	155.150	118.972	期待値(1個)	46.053	154.500	108.447
期待値(2個以上)	30.122	67.850	52.028	期待値(2個以上)	15.947	53.500	37.553
x2(2) =	6.923		P < 0.05	x2(2) =	10.379		P < 0.01
調整残差(1個)	-2.414*	0.167	1.857	調整残差(1個)	-3.166**	0.785	1.540
調整残差(2個以	2.414*	-0.167	-1.857	調整残差(2個以	3.166**	0.785	-1.540

**P < 0.01 *P < 0.05

表6 社会人による語彙評価の比較

語彙	2011年			有意水準	
	合計点平均	評価点数 語彙評価平均	SD	2012年	2013年
喜 (n=63)	28.6	0.45	0.50	*	
怒 (n=127)	43.2	0.34	0.47	*	*
哀 (n=99)	29.4	0.30	0.46		
楽 (n=62)	23.6	0.38	0.49	***	***

語彙	2012年			有意水準	
	合計点平均	評価点数 語彙評価平均	SD	2011年	2013年
喜 (n=185)	68.4	0.37	0.48	*	
怒 (n=244)	67.4	0.28	0.45	*	
哀 (n=223)	60.8	0.27	0.45		
楽 (n=208)	46.2	0.22	0.42	***	

語彙	2013年			有意水準	
	合計点平均	評価点数 語彙評価平均	SD	2011	2012
喜 (n=139)	54.4	0.39	0.49		
怒 (n=188)	51.2	0.27	0.45	*	
哀 (n=171)	50.0	0.29	0.45		
楽 (n=146)	33.4	0.23	0.42	***	

*** P < 0.001 **P < 0.01 *P < 0.05

表7 辞書に基づく評価の比較

語彙	2011年			有意水準	
	合計点平均	評価点数 語彙評価平均	SD	2012年	2013年
喜 (n=63)	21	0.33	0.47	*	
怒 (n=127)	64	0.50	0.66	**	**
哀 (n=99)	49	0.49	0.50	***	*
楽 (n=62)	26	0.42	0.49	***	***

語彙	2012年			有意水準	
	合計点平均	評価点数 語彙評価平均	SD	2011年	2013年
喜 (n=185)	34	0.18	0.39	*	
怒 (n=244)	76	0.31	0.46	**	
哀 (n=223)	62	0.28	0.45	***	
楽 (n=208)	37	0.18	0.38	***	

語彙	2013年			有意水準	
	合計点平均	評価点数 語彙評価平均	SD	2011	2012
喜 (n=139)	35	0.25	0.43		
怒 (n=188)	54	0.29	0.45	**	
哀 (n=171)	60	0.35	0.48	*	
楽 (n=146)	25	0.17	0.38	***	

*** P < 0.001 **P < 0.01 *P < 0.05

は差がなかった。2012年と2013年には、全ての語彙で差が認められなかった。

3) 2つの評価法による評価結果の相違

社会人の評価も辞書に基づく評価も、表出語彙の評価は、概ね2011年の評価が高く、2012年と2013年の間には差が認められなかった。しかし、〈哀〉に関しては、社会人の評価では他の群に比べて2011年に有意な差はなかったが、辞書に基づく評価では、2011年の評価が他の群に比べて有意な差があり、評価が高いと言える。

IV 考察

1 語彙数の増加と質の低下

若者が日常生活やSNS上で用いる若者言葉は、メディアの影響もあり、非常に多くのバリエーションがある。日々新しい言葉が生まれ、そして死語になるスピードが速いのも特徴であるが、語彙は増加している。久保村らはこれら若者言葉をタイプ別に分類し、省略型の若者言葉を、辞書に登録されている語彙（既知語）に変換する手法を提案しているが⁷⁾、松本らは、若者言葉は、既知

語の省略型、既知語に置き換えられない新しい概念、既知語と同じ表記であるがまったく別の意味になる語も存在し、感情を表現する語彙の場合、この方法の効果は期待できないと述べている⁸⁾。

今回の調査でも、学生は日常的に、同世代や友人間だけで通用する言葉や自分なりの表現等を使用していることが多いと感じた。また、語彙数が2011年から2012年にかけて急激に増加しているのは、若者言葉の特徴と一致している。しかし、語彙数が増加するということは、類似した感情経験であっても、個々によって表現が異なることになり、感情・情動の共有が難しいという側面もある。同世代間あるいは同じ環境にあるグループ内では、特に問題にならなくても、異なる世代との間には違和感が生じる可能性が高い。30歳台から70歳台の社会人が行った語彙の評価が、年々低下しているのも頷ける。また、松本らが示唆するように、本研究でも、既知語への変換が難しい語彙が増えていることが実感できた。

このように、省略された語彙や本来の意味とは違う語彙、多世代に共通理解されない語彙を、多くの若者が当たり前のように使っていることで、世代間のコミュニケーションに弊害が見られたり、感情の機微を表現する語彙が消失したりすることが危惧される。また、「1人のみが表出した語彙」が増加し、共通の言葉から、個人あるいは少数のグループでのみ共通理解される言葉に分散されていくように感じた。しかし、それは一定の年齢層や、限られたコミュニティでのみ共通理解されるのであって、若者言葉の微妙なニュアンスは、高齢者や小児には理解が難しいと思われる。

2 情動スキルに関する自己評価

「感情・気分・情動を表す語彙」は、2011年から2013年にかけて大きく変化したが、「情動スキルに関する自己評価」は、すべての項目で、3年間でほとんど変化がなかった。共通の語彙を知らない（あるいは使えない）学生が増えたり、稚拙な表現や場にそぐわない表現を注意される場面が増えたりしても、多くの学生が、自分の情動スキルに不安を感じていないことがわかる。2011年に小玉らが行った学生と社会人の情動スキルの比較でも、スキルの高い社会人より、スキルの低い学生の方が自己評価は高かった⁹⁾。学生集団にあっては、周囲に同じような価値観を持つ者が多いため、価値観の異なる他と比較して、客観的に自己理解・自己評価をする機会が少ないということも、適切な評価に至らない一因かもしれない。

3 スマートフォン普及とSNSの影響

最近、スマートフォンの普及やオタク文化のメジャー

化により、10代から20代前半の若者やネット住民が使い始めた言葉が浸透する傾向が顕著になった。また、LINEアプリケーション（以下LINEと記す）により、会話形式のやり取りが気軽に行えるようになり、スピーディなやり取りのために、単語のみ、あるいは簡略化された言葉でのやり取りが多くなる傾向にある。（例えば「じわる」時間がたってからじわじわ笑えるような状態。）今回の調査でも省略語が多く見られ、「了解しました」が「り」、「本当です」が「まじ」と記されていた（感情を表現する語彙としては不適切と評価した）。「やばい」は喜怒哀楽すべてに表出されていて、ポジティブな場面でもネガティブな場面でも、便利に使っていることがわかった。

スマートフォンの普及率は、2011年は10%未満であったが、2012年には20%を超え、2013年には30%に達している（様々な機関からの報告があり、数値にも多少の差があるため、おおよその割合を示した）。2015年の調査では、大学生の約94%がスマートフォンを利用しているという報告もあった。LINEは、本研究が開始された2011年6月に利用開始となり、スマートフォンの普及に合わせて利用者が増加した。世界のLINE利用者は、2012年7月末には5,000万人、2013年1月には1億人、4月には1億5,000万人、11月末には3億人と急激に増加している。2015年には、日本国内の10代・20代の若者の8割から9割がLINEを利用していると報告されている。また、大学生の6割前後がツイッターやフェイスブックの利用者であるという報告もある¹⁰⁾。

今回の調査期間が、スマートフォンの普及、LINE・SNSの利用者が急増した期間と一致していることから、学生の語彙の変化には、このことが少なからず影響を与えていると思われる。

4 学生の情動スキルに関する課題

学生の日常のコミュニケーションスタイルは、今後もSNS・LINEの利用がさらに増加することが予想され、対面コミュニケーションを苦手とする学生の増加が危惧される。遠隔コミュニケーション優位の文化的・育成的背景を反映していると言えよう。竹内は、遠隔・間接的コミュニケーションの生活習慣を持つ学生が、スタッフとしてクライアント（患者や高齢者）の前に立つ場面で、果たして自他が期待するレベルで活動できるのか、大きな不安があると指摘している¹¹⁾。電子メールやLINEでは、文字情報だけでは伝えきれない感情や気分を、絵文字・顔文字・スタンプ等で補っており、そのことでトラブルを回避している。しかし現実場面では、子ども・社会人・高齢者の心情を、状況や言葉、非言語的情報等、複雑な情報を基に判断し、適切なコミュニケーションを

とらなければならない。そのためには、様々な世代で共通認識されている言葉の獲得と、それを適切に使用するスキルが必要である。本調査結果からは、学生の言語知識は不十分であり、情動スキルに関する自己評価も適切とは言い難い。学生が、社会で評価される職業人となるため、特に対人支援を基盤とする医療や社会福祉、教育の現場に就労するためには、「情動に関する能力やスキルの理解と習得」「実習を通しての体験的トレーニング」「情動に関する自己評価の習慣化」が重要になってくると思われる。大学側の課題としては、限られた教育課程の中にあっても、学生の情動に関する能力・スキルの向上のためのプログラムを構築することが急務であると考ええる。

V 本研究の限界と今後の課題

情動スキルは、文字や言葉の情報からの読み取りだけでなく、非言語的な情報からの感情の読み取りや状況判断による感情の読み取り、相手の感情理解後の対応等多くの要素がある。今回の調査では、限られた内容での比較であったため、学生の能力やスキルを総合的に評価できているとは言い難い。また、SNS・LINE等の利用状況に関しての情報収集が無かったため、語彙の変化とSNS・LINE等の利用の関連性については、十分考察することができなかった。加えて本研究の対象者が、一部の地域の限られた領域の学生であったため、資料に偏りがある可能性も否定できない。今後は、状況や非言語的な情報からの読み取りに関する調査項目を検討するとともに、もっと多岐にわたる情報を収集し、情動知能や情動スキルを総合的に評価し、学生の課題をより明確にしていきたい。また、現行の教育課程の中でも、学生の情動スキルの向上のための教育内容の検討が必要であると考えている。

VI 結論

A県およびB県の医療・福祉系大学および短期大学3校に在籍する2011年度入学生189名、2012年度入学生260名、2013年度入学生209名を対象に、情動スキルに関する質問紙調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生が使用している「感情・気分・情動を表す語彙」は、2011年から2012年にかけて、急激に語彙数が増加し、2013年はその状況が維持されている。しかし、年々「1人のみが表出した語彙」の割合が増え、多世代に共通認識のある言葉から、個人あるいは少人数のグループでのみ理解される言葉に変容しつつ

ある。

2. 社会人による表出語彙の評価では、2011年から年々評価が下がってきている。また、辞書に記載されていない語彙や不適切な使用の語彙は、増加傾向にある。さらに省略された語彙や本来の意味とは違う語彙、多世代に共通理解されない語彙を、多くの若者が当たり前のように使っていることがわかった。
3. 「感情・気分・情動を表す語彙」は年々変化しているが、「情動スキルに関する自己評価」は、すべての項目で、3年間でほとんど変化がなかった。多くの学生が、自分の情動スキルに不安を感じていないことがわかる。
4. 今回の調査期間が、スマートフォンの普及、LINE・SNSの利用者が急増した期間と一致していることから、学生の語彙の変化には、このことが少なからず影響を与えていると思われる。

VII 謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただきました学生の皆様に、深く感謝申し上げます。

(受理日 平成28年2月23日)

文献

- 1) 楠見孝, 米田英嗣: 感情と言語 藤田和生(編)感情科学の展望, 京都大学学術出版界, 55-64, 2007
- 2) 福井康之, 伊藤徹: 感情の構造論からみた現代青年の特徴, 愛知大学教育学部紀要 教育科学, 第34巻, 13-15, 1986
- 3) 厚生労働省医政局看護課: 「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, 2007.
- 4) 文化庁: 「国語に関する世論調査」報告書http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/
- 5) 豊田弘司, 酒井雅子: 高校生用情動スキルとコンピテンス質問紙尺度の開発, 教育実践総合センター研究紀要 Vol.17, 11-14, 2008.
- 6) 山田洋平: 感情に焦点を当てたSEL(社会性と情動の学習)プログラムの開発, 広島大学大学院教育学研究科 学位論文, 2012
- 7) 久保村千明, 原田俊信, 佐々木洋輔, 山本義人, 亀田弘之: ブログ記事を素材とする若者語処理システム評価方法, 信学技報Vol.105, 2006.
- 8) 松本和幸, 任 福継: 感情推定における若者言葉の

- 影響, 言語処理学会 第17回年次大会 発表論文集, 846-849, 2011
- 9) 小玉有子, 奈良知子, 戸来睦雄, 齋藤三千政: 医療・福祉系学生の情動知能とスキルに関する研究, 弘前医療福祉大学紀要, 5(1). 31-38, 2014
- 10) 総務省: 平成26年度版情報通信白書, 2015. <http://www.soumu.go.jp/>
- 11) 竹内美香: コミュニケーション訓練における会話過程の分析-コンテンツと情動喚起の視点から教育指導を考える, 自由が丘産能短期大学紀要, 第39号, 37-67, 2006.

Transition of Vocabularies Expressing Emotions and Emotional Skills in Students

Ariko Kodama ¹⁾, Michimasa Saitou ¹⁾ and Mutsuo Herai ²⁾

1) Hirosaki University of Health and Welfare 3-18-1 Sanpinai Hirosaki Aomori Japan 036-8102

2) Hirosaki University of Health and Welfare Junior College

Abstract

Based on the rapidly changing environment surrounding the current youth and increased number of youth language, the objective of this research is to clarify the characteristics of students and their future challenges from the transition of “vocabularies that express emotion and feeling” and comparison of “self-evaluation involving their emotional skill” from the past years. We conducted a questionnaire survey about emotion subjecting the first year students who started at one of the 3 universities in A prefecture and B prefecture in 2011, 2012, and 2013 and analyzed the results. The number of vocabularies expressing emotions and feelings has increased drastically from 2011 to 2012, but there are many words that re abbreviated, have different meaning from the original word, and are not recognized by many generations and “vocabulary expressed by one person” has been increasing every year. Evaluation of the vocabulary by the working population was the highest in 2011 and evaluation based on a dictionary was also the highest in 2011 compared to other groups. On the other hand, no difference was found for self-evaluation of emotional skill in 3 groups. It shows that although vocabulary showed a large change from 2011 to 2013, many students are not worried about their emotional skills.

Since this research period was overlapping with the period when there was a large increase in smartphone distribution and LINE and SNS users, we presume that this gave some influence to the change in students' vocabulary. Furthermore, the daily communication style of students is projected to have more SNS and LINE use in the future, so there is a danger of an increased number of students who are not good at face to face communication. We consider that it is urgent to construct a program to improve ability and skills related to the emotion of students.

Key words: Vocabulary expressing emotions, emotional skill, youth language, SNS